

幼児との絵本よみあい活動にみる「子ども性」の検討  
－ 現象学からの考察を通して －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
安藤 明子

本研究は、幼児と絵本をよみあう場において生起する「子ども性」の検討を意図するものである。「子ども性」とは、日常の秩序や社会規範への順応、あるいは効果・効用の重視といった「有用性の論理を超え出ていく志向性」として捉えられる概念であり、意味世界に還元されない「nonsense への志向性」を内包するものとして規定される。また、その性質は子どもの表現活動に顕著に見出されるものである一方、人間一般にも備わるものと考えられる。この性質の様態を、集団の幼児との絵本よみあい実践の現象学的な考察を通して明らかにすることが本稿の主題となる。

本論では「子ども性」概念や「絵本」「よみあい」をめぐる議論の確認を行った上で、筆者の参加する幼稚園文庫における具体例を用いて、1)事例紹介、2)現象学的態度を用いた場の様態の記述、という2段階からなる考察を行った。その結果、1)絵本よみあいの場では「ヨル」「ヤブル」「ノル」という三段階を含む「非日常感覚」へと至る運動として「子ども性」が捉えられる、2)「子ども性」発現の過程には意味世界を超え出ていく種々の様態が伴い場の全体性を高める、3)「子ども性」はよみ手・きき手双方の対等性と一体感を育み「よみあいの場」を醸成していく、以上3点が明らかにされた。さらに、日常を超えゆく志向性が対等な関係を育む様を明示することによって、対人援助学における有用性の枠組みを超えた視点の重要性を示唆的に喚起した。